陸前高田市新しいまちづくりに関する
提案報告書

平成 25 年 9 月から平成 26 年 2 月まで全 6 回開催

①　産業・観光　②医療・福祉　③地域コミュニティ・防災　④教育・子育て

陸前高田市新しいまちづくり市民会議

主　催　　陸前高田まちづくり協働センター
協　力　　陸前高田市

【目　的】

将来に向けて夢と希望を持ち安心して暮らすことのできる「新しいまちづくり」を進めるため、多様な意見・価値観を有する市民が自発的に参加し、地域の課題や産業、福祉、防災など様々な分野について自由に議論を行う場を設置する。
また、市民と行政とが協働して今後のまちづくりを進めるため、市民が望む将来的なまちの姿を検討することを目的とする。

【構成員】

24 名（氏名詳細については、巻末裏参照）

【検討経過】

第 1 回（2013 年 10 月 3 日）
・「参加者自身が描くまちづくりのイメージを話し合う。」
・4 つのグループに分かれ、テーマにこだわらず意見を共有。

第 2 回（2013 年 10 月 24 日）
・「産業・観光」「医療・福祉」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。
・2 グループずつ各テーマを話合い、途中全体のメンバー交代を行い、参加者全員が 2 つのテーマについて意見を出し合う。

第 3 回（2013 年 11 月 21 日）
・「地域コミュニティ・防災」「教育・子育て」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。
・2 グループずつ各テーマを話合い、途中全体のメンバー交代を行い、参加者全員が 2 つのテーマについて意見を出し合う。

第 4 回（2013 年 12 月 19 日）・第 5 回（2014 年 1 月 23 日）
・参加者の希望を優先しテーマごとに 4 グループに分かれ、これまでの意見を再確認する。第 4 回、第 5 回の会議を同一メンバーで話す事により意見を深め合う。
・それぞれのテーマごとに優先的取り組みを決める。

第 6 回（2014 年 2 月 20 日）
・第 1 回～第 5 回までのテーマごとに集約し、取り組みをまとめた提案報告書を、2 グループに分かれ確認し、「陸前高田市新しいまちづくり市民会議」の提案報告書として全体共有する。

(2) 提案整理について

はじめに、設定された一つのテーマに全員の意見・アイディアが反映されるようグループメンバーを変えながら意見を出し合い、それをもとに、固定化されたメンバーでさらに検討を深め、最後に全体で確認共有してまとめる。

内容を深め、具体的に整理していくために、①ひとづくり、②ものづくり、③かんきょうづくり、④しくみづくりの視点となる４つの括りを設定する。

さらに内容の共通するものを分類することにより、今後の新しいまちづくりに重要視すべき課題をまとめた。テーマごとの分類、括りごとの分類、重要課題の分類として整理している。

【重要課題】

① 市民が気軽に利用できる交流スペース・居場所づくり

子どもや保護者、高齢者や障がい者、また地域の人たちが利用でき、交流でき、さらには意見情報交換ができるオープンスペースづくり。

②地域を守り、育てる学びの場づくり

高田という地域を市民が学び深めていく場、未来を担う子どもたちが防災や地域の魅力を持続的に再認識していく取り組み。

③地域を構成するすべての人を尊重した人材活用

キャリア教育、起業家育成、地域づくり等への子どもから若者の積極的な参加、また高齢者、障がい者が社会の一員として活躍できる場の設定。

④市民、各種団体、行政等の連携協働

市民、団体、行政が連携協働したまちづくりを進めるための話合いの場づくりや住民主体の自立した活動づくり。

⑤文化芸能・祭り等による地域のつながりの強化

⑥景観や福祉に関わる条例づくり

⑦特産品を活用した体験、食の発信

⑧危機管理意識を失わないための取り組み

【テーマ別提案】

1.　産業・観光

【2020 年までのビジョン】	
「世界に誇れる陸前高田物語をつくろう！」 ～古き良きものを残し、科学技術の発展に基づいた世界最先端のまちへ～ ○高田が誇れる「歴史文化」、「自然環境」、「景観」を、市民が理解し、後世へ伝えていく ○高田にしかないオンリーワンのものを、観光/産業と抱き合せて世界へ発信する ○外からの目線を取り入れて、新しいものを吸収し、最先端の魅力あるまちへ！ （設定経緯） 　観光/産業の発展を考える上で、他地域と同じようなことをしては意味がない。高田にしかない、歴史文化、自然環境、景観といった、昔からある地域資源をうまく利用しつつ、ビジネスにつながりそうな新しいアイディアは積極的に取り組んでいけばよいのではないか。古きものと新しいものとの融合により、世界に誇れるまちを、市民全体で物語のようにつくっていこうという思いから、このようなビジョンとなった。	
【優先的提案/取り組み①】	括り
1. 観光・産業分野を発展させるために、「高田が好きな人」、「他の地域と比較できる人」、「人と人とをつなげることができる人」、「高田が誇れるものを発信できる人」の、4 つの人材を育てていく	（ひとづくり）
2. 他地域との産業の競争や差別化を図るために、来訪者や高田出身の遠方在住者から、高田の良し悪しを語れる場をつくり、6 次産業化につながるようなビジネスアイディアを創出する。	（しくみづくり）
3. 産業/観光分野を発展させるため、この分野だけに限らず、市民がまちづくりに対してアイディアを出せる話せる場をつくる。	（しくみづくり）
【提案/取り組み②】	括り
◎若い世代のアイディアや意志を尊重するために、地域を担う人材を育成し、互いに理解しあえる環境をつくる。	（かんきょうづくり）
◎高田の良さをまずは市民に知ってもらうために、高田が誇れる歴史文化や自然環境といった地元学を、市民が学べる場をつくる。	（かんきょうづくり）
◎より良いまちづくりのために、商工会、農協、観光物産協会などが市民に対して、将来のビジョンを見せる場を設ける。	（かんきょうづくり）
◎他地域との差別化を図るため、まちなみの景観条例をつくる。	（しくみづくり）
◎障がい者や高齢者が得意分野を活かした仕事を創出するため、市民が 70 歳～80 歳まで働けるようなしくみをつくっていく。	（しくみづくり）
◎他地域にはない特色あるまち並みをつくるため、気仙大工の特徴をいかしたまちなみをつくる。	（ものづくり）
◎交流人口を増やすため、「生きる」をテーマに「防災・復興研修プログラム」を作成する。	（ものづくり）
◎歴史あるまちづくりや景観あるまちづくりのため、気仙大工の職業訓練所をつくる。	（ものづくり）
◎震災のことを市民にも来訪者にも伝えるため、震災に関わる体験館をつくる。	（ものづくり）

◎大人も若者もいきいきできて、息抜きが出来る楽しめる場所を作る。	（かんきょうづくり）
◎事業者が商業しやすく、消費者が買い物しやすいまちづくりのために、事業者が１ヶ所に集まり、統一感のある商業エリアを形成していく（コンパクトシティ）。	（かんきょうづくり）
◎高田の市（いち）文化というものは、地域住民にとっては馴染み深く、来訪者にとっては独特性のあるものなので、市（いち）文化を存続し発展させて、人と人とのコミュニケーションづくりと、交流人口の増加へとつなげていく。	（かんきょうづくり）
◎観光客を呼ぶために、食事の場所も市内に分散させ、体験型のメニューもいくつか用意して、ツアー客が選択できるような観光ツアーリストを作成する。	（ものづくり）
◎高田に行かなければ「食べられない/体験できない」メニューやプランを作成し、交流人口を増やしていく。	（ものづくり）
◎高田にしかないオンリーワンのもの（一本松、気仙大工、気仙杉、りんご、洋ナシ、年中通して花の咲く温暖な気候、北限のツバキ、北限のお茶、北限のゆず）を活かして、産業/観光を発展させていく。	（ものづくり）
◎スポーツ産業の発展を通して、弁当が売れ、宿泊施設に人が来て、おみやげが売れ、飲食業が儲かるなど、高田に多くの利益を生む。 ・そのために、コンサートなどができる野外会場や、プロリーグなどの試合もできる充実したスポーツ施設をつくり、誘致をしていく。	（ものづくり）

（提案/取り組み設定の背景）

産業/観光分野を発展させるためには、人材を育成していくことが重要である。市内市外問わず、「高田が好きな人」、「他の地域と比較できる人」、「人と人とをつなげることができる人」、「高田が誇れるものを発信できる人」の 4 つについて、人材を育てていくことが、ビジョンを達成する上では必要なことである。また、その人材をうまく機能させるためには、産業/観光に関わるアイディアを創出することが大切である。このアイディアに関しては、高田の基幹産業にも当てはまる１次＋2 次＋3 次産業を併せ持った「6 次産業化」にもつながっていくため、高田の中だけで考えるのではなく、外からの目線を取り入れたアイディア創出の場を持つということも重要である。それに関連して、産業/観光分野だけではなく、まちづくりに関するすべてのことに市民がアイディアを出せる場をつくることも重要である。誰もが意見を言いやすいように、互いに理解し尊重するしくみを地域で重んじることにより、高田を担う次世代が、まちづくりに参加できることにもつながっていく。次世代の人材を育てるためには、しくみやかんきょうづくりなども重要であることを念頭に置きつつ、私たちでも出来ることとは、自分も含めたひとづくりではないかと思い、このような優先順位となった。

（今後の検討の視点）

・1 次 2 次 3 次それぞれの産業に関する内容について具体的な取り組み。

２．地域コミュニティ・防災

【2020 年までのビジョン】	
「命を守るために」　～心あるコミュニティづくり　皆で考え、皆で話す防災～ （設定経緯） 地域コミュニティの求めるところは「心あるコミュニティ」、 防災も地域コミュニティもみんなで考え、みんなで話してアクションを起こすための組織の構築をする事が必要。 地域コミュニティと防災とは、別々に考えがちだが、元々の考え方としてつながっている。つながりとは何か。「命を守る」事がもととなっている。	
【優先的提案/取り組み①】	括り
1.観光客にもわかりやすい避難誘導のための看板の設置をする。 ・高田のマスコットであるゆめちゃんが逃げているマークを作って、看板に採用する。 ・どこが高台なのかをはっきり知らせる。 ・津波浸水域の水位を電柱や建物の壁に表示する。 ・震災の爪痕を目に見える様にしていく事が重要。 ・線で知らせるのではなく、高さでどこまで来たのか分からなくてはいけない。 2.観光客にもわかりやすい避難誘導のために、まち歩きをし、マップを作成する。 ・逃げるための道を知る（名もなき道を知る必要性）。 ・「山の斜面に手すり付の階段が欲しい」などの要望も拾う。 ・逃げるための方法は常に変わり、一度作って終わりではなく、作り変えていくもの。 ・毎年（定期的に）更新が必要であり、作り変えていくためにはマップ作りの経験が必要。 ・マップ作りを通してコミュニケーションが生まれること、しがらみの解消の糸口が見える事が期待される。 ※マップ作成に関しては毎年更新していく事が必要とされ、地域で作成にかかわっていく事でコミュニティの強化につながる。 3.（心を閉ざしている人を含めた）みんなのためのみんなの居場所を作る。 ・心の声を届けられる場所の必要性を感じる事から、いごこちのいい場所探しを進める。 ・自分の時間が許す限り「ほっ」と出来る場所（どこか開放してくれるところはないか？）を作る 。 ・大会議室やホールと、サークル活動などで使用できる小規模な部屋を併設した施設をつくる。 ・どんな場所があったらいのか自由に話すワークショップを開催。 ・居心地の良い場所を考える（作る）ためのワークショップ開催。	（ものづくり） （ものづくり） （かんきょうづくり）
【提案/取り組み②】	括り
◎地域力を高めるために、ひとづくりをすすめる。そのためには、楽しく学べる場所や機会が必要。 ・サバイバル飯コンテストや検定の開催（押しつけではないものの方がいい）。 ・実際に自分でつくった物を使ってみるなどの体験をする　例)「かっこいい寝袋づくり」（子供たち向け）。 ・１人１人の「学び」「成長」の為、楽しく学べる場所や機会が、押しつけではなく緩やかな地域との関係づくりにつながる。	（ひとづくり）

◎郷土芸能で、地域コミュニティを活性化していく。 ・地域のつながりを大事にしていくために郷土芸能は重要。 ・七夕の開催に合わせて各地域の郷土芸能発表会を同時開催する。	（ひとづくり）
◎防災マップは、消防団、行政、地域住民（部落単位）の三者で作成する。 ・実際に生活している住民の意見も取り入れ、有効的に活用できる地図を作成する。 ・世代ごとの目線で考えながら、先人の知恵も取り入れる必要がある。 ※過去の体験、過去の事実 ≪地域住民が主体となる防災マップ作成の流れ≫ ①　たたき台としての防災マップ（行政にお願い）。 ②　様々な世代ごとの防災マップ＋逃げ地図作成。 ③　実際に避難し、その後の避難所生活についても考える（防災ピクニック）。 ④　体験したことに対しそれぞれ検証を行い、世代別の注意点や課題点なども共有する。 ⑤改めて防災マップを見直し、場合によっては再度防災マップを作成したり、防災ピクニック等を行う。	（ものづくり）
◎消防団、自主防災、女性の活動の連携の為に、横のつながりも見直しをしていく。	（しくみづくり）
◎まちづくりを人任せにしないために、住民の意識を変え、それぞれの得意を伸ばし、担い手を育てる。 ・地域を担う人材を育成していくために、互いに理解しあえる環境をつくる。	（ひとづくり）
◎これからのコミュニティづくりのために、工夫されたコミュニティや地域モデルをつくる。 ・共感し合える、コミュニティでの一体感をもとに防災に関する取り組み、お祭りへの参加も促進する。	（ひとづくり）
◎コミュニティを形成していく中で、イベントやお祭りを通した人とのつながりづくりを進める。 ・昔のコミュニティの良さと、今のコミュニティの良さをどうマッチングしていけるかがポイントとなる。 ・地域を越えた「心あるコミュニティ」が必要。	（ひとづくり）
◎行政と地域が連携し、防災に関する研修の場を意図的かつ定期的に、みんなでつくる。 ・減災の考え方も取り入れる。 ・市内全域でそれぞれの防災に備えて訓練をしていく活動をつくる。 ・避難所（運営）資格を全国に先駆けて実施する。 ・避難所とはどんなものなのか体験をさせる事が訓練になり備えになる。 ・県外の人達も市内の人達と同じ訓練をさせる事が出来るシステムを考える。 ・避難場所はお寺や神社が主だったので、お寺や神社での避難生活体験をさせるための仕組みを考える。（宿泊、食事、体験、お土産、他にもつなげる事がたくさんある）	（しくみづくり）
◎語り継ぐことを重視した防災教育を進めていく。 ・語りついで行く事の大事さは何を伝えたいかを明確にすることが必要。 ・想定外の想定が重要（考えられることを全て盛り込んだ防災訓練を地域で行うべき）。	（ひとづくり）

◎防災関連の施設を建設し、実際に逃げる体験や、津波の強さを知る体験が出来る様にする。 ・3D 技術などを取り入れ、実際に逃げる体験をする。	（ものづくり）
（提案/取り組み設定の背景）	
地域コミュニティと防災とはつながりがあり、そのつながりは「命を守る」事が発端となっている事から、この地で生活していなくても、言い伝えを知らなくても、命を守る事を共通原点としてまちづくりを考える。命を守るため、逃げるため、助け合うための防災マップづくりや研修、話し合いを通して、コミュニティの中に求める人とのつながりや心のよりどころを再構築する事が、地域にとって必要である。	
（今後の検討の視点）	
・地域運営やビジョンに関して具体的な取り組み。	

３．教育・子供

【2020 年までのビジョン】	
「地元の事を知る高田学教育の導入」 ―地元に愛着をもつひとづくり、帰ってこられる環境づくりのために （設定経緯） 人口の減少を食い止めたいということを基に、視野を広げるために外に出た若者が結局戻ってこない事態を避け、彼らに戻ってきてもらう、留まってもらうために何が必要かを検討した。大切なことは陸前高田に戻りたいと思ってもらうこと、帰ってこられる環境をつくることであり、そのためにまずは地元のことを知り、地元に愛着をもつ人を育てることを第一と考え、このビジョンを設定した。	
【優先的提案/取り組み①】	括り
1. 人口の流出を防ぎ、外に出た若者に戻ってきてもらうために、足元を固めるために地元の事を知る機会を取り入れる。 ・産業/歴史/文化/お祭りなどの伝統と地元教育、防災をカバーした副読本を作り直し、義務教育 9 年間の学校の授業に取り入れる（地元教育カリキュラムの作成）。 ・地元の人材と教育を結び付け、好循環の仕組みを働かせるために、人材データベースを構築/管理する。 ・自分たちのまちを知るために、地元検定を導入し、検定合格者に認定書を作成、配布する。 ・講座の形ではなく、構えず体験しながらまちを知る試みとして、夏季/冬季休みの平日を活用し、イベント「まちを体験する日」をつくり、地域という学校へ学びに行く感覚で参加してもらう。	（しくみづくり） （かんきょうづくり） （ものづくり）
2. 陸前高田の著名なお祭りへの参加を通して、地元に愛着を持ち地元に帰ってくる人を育てるために、市民が関われる仕組みを作る。 ・お祭りのポスターをコンテストにして学生に参加してもらう。	（ひとづくり） （しくみづくり） （しくみづくり）
3. 職場体験を通じて、自分のまちにどんな仕事があるのかを知り、将来の職業選択に幅を持たせる。	（ひとづくり）

・市内全部を使ってキッザニア（子供向けの職業体験型テーマパーク）をする。	（ものづくり）
・支援等で訪れる人も多いことから、彼らとの交流を通じて、いろいろな仕事に触れる機会を設け、視野を広げると共に、自分で起業できる子どもを育てることにつなげる。	（ひとづくり）
・小学校は「仕事の種類を知る」、中学校は「働く大変さを知る」、高校は「インターンシップを取り入れる」等、学年/年齢に合わせて学びのレベルを上げる。	（しくみづくり）
・子ども達/事業主/地域一体の受け入れの仕組み、地域で学べる環境をつくり、学校（授業）での職場体験と、学校では学べなかった部分を補う目的で子供会など地域での職場体験を組み合わせ、より詳しく学ぶ機会を設け、これを継続する。	（かんきょうづくり）
【提案/取り組み②】	括り
◎スポーツ少年団の活動を通じて、他の学年、スポーツ団体、地域との交流の場をつくり、その中でコミュニケーション方法を学ぶ。 ・交流の場を通して社会に出る前に礼儀を学ぶ。 ・世代間交流を促進するために、スポーツ少年団を通じた子供時代からのコミュニケーション方法の習得を図る。	（ひとづくり） （かんきょうづくり）
◎世代間の接点をつくるために、図書館を地元教育の活動拠点として有効活用する。 ・例えば、仕切りなどを作って、子どもにお話会をしながら、母親はゆっくりできるようなスペースを設置する。 ・防災を絡めた世代間交流として、子どもたちが高齢者の施設や老人クラブの集まりなどに参加し、世代を超えて意識をつなぐ。	（かんきょうづくり）
◎子どもたちの学力向上のために、「学びの部屋事業」を小学校にも取り入れる。	（しくみづくり）
◎シニアボランティアを学習サポートの人材として活用する。	（しくみづくり）
◎地域の大人たちとの交流の場を設定、活用する中で、体験と学びの中から緊急時に使える技を身に付ける。	（ひとづくり） （かんきょうづくり）
◎ホームスタート（家庭訪問型子育て支援）を導入する。	
◎高田にいても色々と学べる環境をつくる。（国際交流など）	（ひとづくり）
◎高田の良さを知る経験をする。 ◎若い人が子育てしやすい環境を整える。	（しくみづくり）
（提案/取り組み設定の背景）	
ビジョンに基づいた優先事項として、自分たちのまちのことを知らずして愛着を持つことは出来ないだろうとの考えから、まず地元の事を知るための地元教育の導入をあげた。義務教育だけではフォローできない部分については、地域に学びの場をつくり、学校と地域が一体となって育てるしくみ、環境を作りたい。その中では職業体験を通じてまちにある仕事を知り、1次産業の体験も交えて後継者候補を育てたいという思いも含んでいる。そして、帰ってこようと思うきっかけ、つながりとして、お祭りを重要視した。子どもの頃に祭りに参加する事がコミュニティに加わることにそのまま繋がり、そこで出来たつながりと思い出は、一度外へ出た人々が再びまちへ帰ってくる、帰ってきたいと思う動機になる。	
（今後の検討の視点）	
・若い人達が子どもを産み育てていくための具体的な取り組み。	

４．医療・福祉

【2020 年までのビジョン】	
「お互い様の心で、みんなで支え合うまち」 （設定経緯） 　ハード面や仕組みに関する問題も多々あるが、「ノーマライゼーションという言葉のいらないまち＝お互いが、お互いを思いやる」と解することで、みんなでサポートし合えるまちをつくれるのではないか、という考えからこのビジョンとなった。	
【優先的提案/取り組み①】	括り
1. 高齢者/障がい者/家族等が自由に出入りでき、気軽に思いを話せる公共のフリースペース/居場所を作る。 2. 高齢者/障がい者への外出/通院をサポートする移動サービスを充実させる。 ・ルート/時間帯/便数など使い勝手を検証し、官民連携で第三セクターが運営する巡回型バスを設置する。 ・高齢者/障がい者を対象としたバス専用カードを作るなど、使いやすくかつ安価な交通の便を確保する。 3. 効率的な情報提供と必要な情報にアクセスしやすい環境を作る。 ・専門家を交えて団体間の情報共有のしくみを作る。 ・学校統廃合で使用しなくなる施設を、医療/福祉に関する窓口となる総合センターにする。	（かんきょうづくり） （かんきょうづくり） （かんきょうづくり）
【提案/取り組み②】	括り
◎現行制度で対応していない高齢者や障がい者へのサービスを洗い出し、「今〇〇したい」を満たす福祉サービスのビジネスモデルを作る。 ・現在シルバー人材が行うサービスの医療/福祉ヘルパー型事業を強化していく。 ・買い物代行だけでなく、「一緒に買い物をする」「荷物を持つ」などの補助的サポートを充実する。 ◎市民が子供の時から障がい者、認知症などについて理解を深める。 ・イメージで括らずに「障がい者」について知り、お互いを理解することで、個々の意識からまちの雰囲気や空気感を変えていく。 ・行政側と市民側の 2 つの視点で、ルールや条例整備は行政、福祉に対する普及啓発は市民が主導を持つ。 ◎障がい者に優しいまちづくりのために、商店街で「こんなことをして欲しい」を話し合うワークショップなどを開催する。 ◎まち全体が包括的な福祉ケアを行う。 ◎障がい者が商店街や歩道など市内のバリアフリーを検証し、改善案を提出するだけでなく、行政から回答をもらって一緒に改善していくしくみを作る。 ◎災害公営住宅や地域コミュニティなどの中に、各世代が交流できる場を作りそれぞれに役割を持つ。 ・家庭菜園など高齢者が集会所以外で集まり、また子供たちとも関われる場を作る。 ・子育てしやすい環境のために、地域とつながり顔の見える関係構築をし、安心で安全な環境をつくる。 ・世代間交流の促進のために、デイサービスと保育園を併設した施設をつくる。	（かんきょうづくり） （ひとづくり） （かんきょうづくり） （しくみづくり） （かんきょうづくり）

◎ノーマライゼーションという言葉のいらないまちを実現するための意識づけやしくみ等を策定するための条例を制定する。 ◎福祉の観点で見て、外から来た人にも住民にも「陸前高田はいいまちだ」と思えるまちにする。 ・信号機/標識/トイレなど、生活に密着した危険や要望を優先して改善していく。 ・工事業者や検査機関にハンディキャップ体験をしてもらい、市民や行政もそのような体験をする日を設ける。 ◎復興に前向きになれない方を引き出せる組織や関連施設をつくる。 ・高齢者の介護、DV 被害、孤独死の防止など、一括して相談できる総合的なセンターを作る。 ◎地域の見守り体制を構築するために、各地域にサロンのようなものを作る。 ・公営住宅設計段階から、専門家の意見を取り入れながら、グループホームやデイサービスを入れる。 ・退職した医療従事者/専門家などが公営住宅に常駐する。 ◎市民芸術祭と障がい者作品展を合同開催する。 ◎医療過疎の地域に、月 1 回でも診療車で巡回する。 ◎心のケアは 4～5 年後のこれからが特に大事なので、まち全体での見守り、声掛けをする。	（しくみづくり） （かんきょうづくり） （かんきょうづくり） （かんきょうづくり） （しくみづくり） （かんきょうづくり） （かんきょうづくり） （かんきょうづくり）
（提案/取り組み設定の背景）	
この分野においては、どうしても当事者や関係者でなければわからないことも多く、一概に「○○を作れば解決する」ということにはならない。解決するためにはまず市民が共通の認識を持ち、当事者/関係者の意見を聞き、地域や市全体で考えていかなければいけない。 まず、どのような仕組/施設/サポートがあるのか現状を洗い出し、対応できていない部分について当事者を交えて検証するという段階を踏むなど、住みやすいまちをつくるためにみんなが力を合わせていく必要がある。	
（今後の検討の視点）	
・「未病」「予防」を意識した健康増進につながる具体的な取り組み。	

【市民会議の成果と課題】

（1）成果

･市民が望む将来的なまちの姿が検討され、たくさんの意見が出されたことで、新しいまちのイメージが共有できた。
･市民がこれからのまちづくりについて、テーマごとに具体的なアイディアや意見を交換する貴重な場となった。
･市民が考える 2020 年までのビジョンが出され、みんなで取り組むべき案が多数出された。
･今回まとめた提案報告書をたたき台として、さらに多数の市民の意見を加えながら、まちづくりをみんなで進める事が出来る。
･お互いの意見を知り、個々の意見が尊重され、まとめられた。
･まちづくりに対して、みんなで考える場ができた。

（2）課題

･現時点では、個々の意見を集約したものにとどまっているため、まちづくりに対してさらにたくさんの意見をいただき、ビジョンや提案をより具体的、かつ現実的なアイディアにしていく。
･まちづくりに関わる主体が、この提案報告書をもとにつながり、みんなで考え、みんなで話し、アクションを起こしていく。
･つくって終わりではなく、継続的に見直し、次年度以降、よりよいものにしていく。
･女性の視点をもっと重視した検討が必要。